

中等部第1回

国語

平成28年2月1日実施

50分

2016年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一・二〕があります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
- 四、問題は解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公のおれ（ゆきと 征人）は天徳島に住む中学二年生。島での生活を嫌きらっており、いつか都会に出ようと心に決めていた。一方、友達の孝俊はたかとし この島で生きていくことにこだわりをもっており、島の外の人間によって、島伝統の神事や生活を荒あらされることを嫌っている。ある日、東京からタオという少年が転校してきた。おれと友達の保生はやすお 彼をかれ 気に入っていたが、孝俊は彼に悪い印象を持っていた。

「こんにちは」

突然の声に、思わず肩が持ち上がる。振り向くと、そこにはタオがいた。驚おどろいた。まったく気が付かなかった。

「飛び込み？」

捉とらえどころのない、なんの感情もないような表情で聞いている。

「あ、ああ、そうだよ」

声が裏返ってしまった。気配を察したのか、孝俊と保生が上体を起こす。

タオの姿を見て、孝俊が眉根を寄せた。保生は困り顔だ。①タオは二人の様子におかまいなしで、崖の先端まで行き、

「ここから飛び降りるの？　すごいなあ」

と、質問なのかひとり言なのかわからない一本調子で言った。それから崖を見下ろして、遠くの海を見て、手をかざして空を見て、また海面に目をやるといふ動きを何度か繰り返した。

気まずいのはおれたちのほうだった。なにを話していいかわからないし、孝俊がイラついているのも伝わってきた。②夕

オは暑いなあと言つて、首に巻いたタオルでのんびりと額の汗を拭いたりしている。

「お前もやってみ」

突然、孝俊が口を開いた。

「え？」

「飛び込みだよ。簡単だよ。ここではみんなやってる。ここに住んでるなら、お前もやれ」

タオは涼しげな表情で、どうかなー、厳しいだろうなー、と誰にともなくつぶやいている。

「やってみーつて」

「えー、やるなー、孝俊」

③ 思わず声をかけた保生を、孝俊がにらむ。

「港のほうでよくやってただろ。同じさー」

孝俊があおる。確かに午前中にやった宗見港のほうの防波堤では、タオが飛び込みをしているのを何度か見かけたことがあった。タオは飛び込みよりも、シュノーケリングが好きな様子で、シュノーケルと足ひれを着けて、海面をバチャバチャと泳いでいるのをたまに見かける。この人間で、泳ぐときにシュノーケルや足ひれを着ける奴なんていないから、いやでも目立つ。

「飛び込んでみー。気持ちいいよ。泳げるんだろ」

「いや、ぼくはあまり泳ぎは得意じゃないよ。フィンがないと無理だと思う」

ああ、足ひれのことをフィンと呼ぶんだ、とおれはそんなことを思った。

「無理しないほうがいいよ」

保生が言い、

「そうだよ、この高さはきついよ。やらん方がいいよ」

と、おれも加勢した。海で無理をしてはいけないことは、身体がよく知っている。

「お前たちは黙れ。どうか、タオ。やらんのか」

タオは少し考えるような素振りを見せてから、「やめておくよ」と言った。

「港のほうで練習して、もつと泳げるようになったらいつか挑戦したい」

「使えんな。だから東京人はダメなんだよ」

タオは、意味がわからないといった顔で首をかしげた。その表情でまた孝俊がイラついたのが見てとれた。

「ここ、何メートルあるの？」

「六メートルくらいじゃないか」

と、おれは答えた。タオは崖の下に興味深そうに覗き込んでいる。

「高いなあ」

しみじみと言う。

「高いなあ。やってみー」

孝俊がタオの後ろに立った。

「足をここに掛けて、一歩進むだけ」

タオが崖に足をかける真似をした。孝俊がもう一歩近づく。

「孝俊、やるなよ。わかってるよな」

保生が少し大きな声を出した。おれは、まさかと思っていた。いくら孝俊だって、そんなばかな真似はしないだろうと。孝俊がほんの一瞬、おれたちのほうを見た。

「孝俊」

保生が再度、声をかけた。その次の瞬間、孝俊がタオの背中にすつと手を伸ばしたのが見えた。

「やるなっ！」

保生の声と、タオの破裂音のような短い悲鳴が聞こえた。タオが手をばたつかせ、海に吸い込まれていくのがスローモーションのように見えた。

「タオッ！」

保生が叫ぶ。長い時間に感じられた。突然、盛大なしぶきが上がり、タオが浮かんで、また沈んだ。大きなしぶきが立つ。おぼれているのだ。

保生がすぐさま飛び込んだ。考える間もなく、おれも続いた。タオは無様に手足を動かして、必死に保生にしがみついた。

「タオ、大丈夫！ 落ち着け、落ち着け！」

タオは無我夢中で手足を動かす。完全にパニックになっている。このままでは、こっちまでおぼれてしまう。

「大丈夫やさ！ 落ち着け！」

おれもタオにしがみつかれて何度も顔が沈み、海水を飲んだ。ハナが痛い。目がしみる。

保生と二人で、なんとかタオの左右の脇に肩を入れ、必死で岩場まで連れて行った。

「タオ、大丈夫かっ」

タオは激しくむせている。その顔は真っ青だった。眼球が泳いで白眼になった。

「タオッ！ しっかりしえ！」

タオはそのまま意識を失った。

「お前はなにをしてるかっ！」

孝俊は、父ちゃんに大目玉を食らい、おれと保生の前でガツンと二発ぶん殴られた。

今回のことはあつという間に知れ渡った。気絶したタオをどうしたらいいのかわからずに、大人たちを呼びに走ったから、当然といえば当然だった。

タオの意識はそのあとすぐに戻ったけれど、ひとつ間違えれば、大変なことになっていたかもしれないのだ。

なぜ一緒にいたのに止めなかったのかと、保生もさんざん父ちゃんに怒られ、おれも母ちゃんにこつぴどく叱られた。夏休みだというのに校長先生にまで話がいき、おれたちは学校に呼び出され、こんこんと説教をされた。転校生のタオだったから、というのもあつたと思う。島の子ども同士だったら、ただのおふざけで終わっていたかもしれない。

「父ちゃんから言ってください」

漁から帰ってきた父ちゃんをつかまえて母ちゃんが言い、おれは黙って下を向いていた。すでに父ちゃんの耳にも入っているのだった。

「もう十分怒られただろ。征人はちゃんとわかってるさ」^⑤

父ちゃんは、おれにはなく母ちゃんに向かって言い、おれの肩に軽く手をやって、そのまま風呂場に行ってしまった。なんともいえない気分だった。

翌々日、三人でタオのお見舞いに行った。タオはすっかり体調がよくなったのか、いつも通りの様子で、本を読んでいた。

「タオ、ごめん」

「本当にごめん」

おれと保生は頭を下げた。孝俊は口をつぐんで、一緒に頭を下げただけだった。タオは首を振って「いい経験させてもらったよ」と、唇の端を持ち上げた。笑ったのだと思う。タオんちのおじさんも、男の子は仕方ないよなあ、とにこにこ笑っていた。

タオの家は本だらけだった。本棚に入りきらない本が、そこらじゅうにムゾウサに積み重ねてあった。ここだけ別世界のようで、おれはちよつと興奮した。夢中で眺めていたら、おじさんが、「読みたいものがあつたら持つていいよ」と声をかけてくれたけど、そもそもどれが読みたい本なのかすらわからなかった。

帰り際、おじさんが、

「タオとまた遊んでやってください」

と急にかしこまって言い、おれたちはへどもどして頭を下げて、タオの家をあとにしたのだった。

「孝俊、ちゃんとタオに謝るまでおれは許さん。命にかかわることだ」

タオの家からの帰り道、保生が厳しい口調で孝俊に詰め寄った。こんな保生を見るのははじめてだった。これまでも孝俊はどこか、おれと保生を子分のように扱っていたし、リーダーシップのある孝俊の言うことは、おれたちも自然と受け入れる態勢になっていた。孝俊に面と向かつて歯向かうなんて、これまで一度もなかったことだ。

「……冗談のつもりだったんだけどよ」

父ちゃんに殴られて目の下を紫色にした孝俊が、ぼそりと言う。

「冗談ですむか。わかってただら」

保生の言葉に孝俊は黙っていたが、保生はかまわず続けた。

「そもそもお前の考え方におれはついていけない。新しく来た人がなんで悪い。ここに住むんだよ。天徳の人間はどんな減ってる。感謝するんじゃないくて、いじめるんか。おかしいだら。内地人も、本島の人間も、ここの人間もみんな同

じ。差別するな」

しばらくの沈黙のあと、孝俊が口を開いた。

「……天徳を勝手に荒らされてもいいんか。これまでの神事がなくなってもいいんか」

「荒らされていいって言っていない。内地人が間違えるのは、決まりを知らないからさ。立ち入り禁止の場所とか、この決まりをちゃんと教えればいいだけさ。それもしないで文句だけ言うのはおかしい」

「おばあちが許さんからしょうがないだら。看板ひとつ立てるのも、神様がいいって言わんし」

「神様の答えを何年も待っている間に、なにも知らん内地人が来て問題になってるわけだら。神様も大事だけど、生きる人間がなにかするほうが大事っておれは思う」

「保生はここの神様とか、おばあちをばかにしてる」

「してない！ 逆、大事にしてる」

今まで見たことのない、おれの知らない保生だった。保生はいつでも穏やかに笑っていて、争いごとを好まないし、小さい子や女子にだってやさしい。学校で先生に指されても、ほけつとしていてしばらく気が付かないこともあるくらいのんびりした男だ。

「征人はどう思う」

孝俊に急に振られて、どう言おうかと一瞬悩んだ。孝俊の気持ちもわかる。孝俊は天徳島が大好きで、とても大事に思っているということはちゃんとわかつてる。でも、それでも、今回の件は見過ごせなかった。

「……保生に賛成」

孝俊の目つきが鋭くなる。

「そうか。確かに、タオのことはおれが悪かった。だけど、天徳のこととは話がべつ！」

「べつじゃない！」

保生が間髪を容れずに返す。

「もういい。おれが嫌なら、一緒に遊ばなくていい」

孝俊が背を向けて歩き出した。

「待つて。まだ話終わってない」

保生の声を無視して、孝俊は自転車に乗って行ってしまった。保生と顔を見合わせる。

「なんでよー」

⑧ 保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ。

保生と二人で、ぶらぶらと天浜まで自転車をこいでいった。最近では飛び込みばかりで、この浜で泳ぐことも少なくなった。朽ちたサバニが一艘、打ち捨てられている。三メートルほどの、杉材でできた小さな船だ。かつて、大海原で活躍したサバニ。ずいぶん昔からここにある。

ザーン ザザーン。

夕焼けにソまった穏やかな波が、浜に寄っては海に帰ってゆく。おれたちは岩場に腰を下ろした。

（椰月美智子『14歳の水平線』双葉社）

※眉根を寄せた……不快な気持ちや心配の念から眉のあたりにしわを寄せる。

※内地人……北海道や沖縄などに住む人が本州に住む人を指して言う言葉。

問一 線部（a）（c）のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①「タオは二人の様子におかまいなしで、崖の先端まで行き、」②「タオは暑いなあと行って、首

に巻いたタオルでのんびりと額の汗を拭いたりしている。」とありますが、ここからわかるタオの性質としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 嫌われることを恐れて積極的に人と関わらない。

イ 自分の本心や感情を表に出すことが苦手である。

ウ 人を驚かせるためには手段を選ばずに行動する。

エ 周りの状況をあまり気にせずマイペースである。

オ こわいもの知らずで自己中心的なふるまいをする。

問三 線部③「思わず声をかけた保生を、孝俊がにらむ。」とありますが、この時の孝俊の心情はどのようなものだと考えられますか。本文全体をよく読んで、もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けしかけるようなことを言われていらだっている。

イ 遊びの主導権を保生に奪われまいと警戒している。

ウ 余計な口を挟んで邪魔をするなどがめている。

エ 急に大声を出されてとまどい不審に思っている。

オ 意外なことを言われてめんどろだと感じている。

問四 線部④「そんなばかな真似」とありますが、どのようなことですか。十五字程度で説明しなさい。

問五 線部⑤「征人はちゃんとわかってるさ」とありますが、何をわかっていると父ちゃんは思っているのですか。その内容が書かれた部分をこれより前の本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五文字で答えなさい。

問六

——線部⑥「お前の考え方におれはついていけん。」とありますが、それは保生の考えがどのようなものだからですか。説明しなさい。

問七

——線部⑦「孝俊の目つきが鋭くなる。」とありますが、それはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 保生だけでなく征人まで自分の考えに反対し、裏切られたような気がして怒りを感じているから。
 イ 征人に思いがけないことを言われたために理解ができず、集中しようと気をひきしめているから。
 ウ えらそうなことを言っても、どうせ自分には逆らえるはずがないだろうと征人を見下しているから。
 エ 征人は保生にまどわされているだけだと自分に言い聞かせ、落ち着いて対応しようとしているから。
 オ 保生と征人がタオの味方になったと思い、これから二人とどうつきあうべきかとまどっているから。

問八

——線部⑧「保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ。」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アンパンマンはスーパーマンです。ヒーローだから、いつも悪に向かって戦わなくちゃならない。だけれどアンパンマンには弱点がたくさんあります。もともと食べ物だから汚いものが苦手で「かびるんるん」には弱いですし、顔が雪や水に少しぬれてもすぐに「力が出ない」と情けなくダウンしてしまいます。史上最弱のスーパーマンかもしれませんね。得意技のアンパンチだって、敵のばいきんまんを殺すことはありません。ばいきんまんは死ぬのではなくて、自分の家に帰ってしまうだけです。①アンパンマンは、ばいきんまんが死なないように殴っている。アンパンチは、相手をボカボカに殴るのも悪いので一発でボカーンとやってしまおう、アンパンだからアンパンチと簡単に作っちゃった技です。

ばいきんまんだってやたらにふんづけたり「最後だ、とどめだ!」とかやっているけど、アンパンマンが死ぬことはない。あれもわざと外してやってるんじゃないかと思えます。本当にあんなのでゴンとやれば死んでしまいます。でもアンパンマンはへこむ程度で終わるんだよね。本当にはやられないように手加減しているのじゃないかな。そういうことで、アンパンマンとばいきんまんは戦ってはいるけれど、ある部分は仲良しがじゃれ合っているところもある。ばいきんまんは、やられても次の週になると平気な顔で出てきます。

現実の世界でもばい菌にやられると病気になるってしまいますので、排除はしなくちゃいけないのだけど、相手を殺してしまう必要はないということなんだよね。

これはどういうことかという、人間の最大の敵はばい菌なんです。みなさんのおなかの中、口の中にはばい菌がたくさんいる。例えばインフルエンザにかからないように予防チユウシヤをしますね。抗生物質が発見されると、インフルエンザは治るようになります。でも抗生物質を使うと、今度は抗体を持った新型のばい菌が出て

きて、それまでの薬がきかなくなってしまう。そうするとこちらはまた対抗する薬を作っていく。それに対抗して新型菌が出てくる。新型には今までのチュウシヤはきかなくて……と、この戦いは永遠に続いていくのです。

② アンパンマン対ばいきんまんの戦いと同じです。

それから、酵母菌のようにパンを作るのに必要な菌もあるし、納豆菌、ニユウサン菌、有用善玉菌もたくさんある。ばい菌はいろいろです。

残念ながらそれが健康な社会なんです。ばい菌が絶滅すると、人間も絶滅する。絶えず両方が拮抗して戦っているというのが健康なんです。何人かは負けて死んでいくけれど、それも仕方がないんだよね、たとえ人間が善人ばかりだとしても、増えすぎちゃダメなんです。気の毒だけどそうなんです。誰一人死なないとなると、バランスが崩れて大変なことになる。

必要悪という言葉がありますね。つまり光がなければ影もないし、影がなければ光もない。

絵を描く時にも光を描きたければ影を描けなくちゃいけない。新印象派のフランス画家、スーラはそれが非常にうまい作家です。デッサンを見るとよく分かりますが、影の部分が非常にうまいですね。だから光を描ける。

④ とにかく全部善良というわけにはいかなくて、必ず敵対するものがある。そのバランスが良くとれている時が健康な社会です。

人間も増えすぎて困る部分があります。宇宙の中で考えれば、人間の数は少しくなり過ぎて、限界を超える時がくるかもしれません。でも、だからといって戦争をやるにしても、昔のようにチャンバラやって何人か死ぬという程度でやめておかないと、原爆を投下するようなことをしてはいけません。ああいうことをやると全滅します。完全にバランスが崩れてしまいます。だから、ああいうことはやっちゃいけない。

アンパンマンは戦っていて怖くないのですか、と聞かれることがあります。アンパンマンも怖い時があるんじゃないかと思います。アンパンマンはヒーローの役をやらなくちゃいけないので、自分から怖いとは言えないんじゃないかな。ヒーローは大変なんです。

それから他のキャラクターはいろいろ食べたりするけれど、アンパンマンは泣かないし何も食べない。なぜかと言われてもなんとも言えないですけどね。それから、ばいきんまんやドキンちゃんは、いつも自慢ばかりしています。アンパンマンは「ぼくはすごいんだ」とか「ぼくはエライ」とか自慢しない。慎ましいですよ。

⑤ 正義は勝ったと言っているやつは嘘くさいんです。

正義を行う人は非常に強い人かという、そうではないんですね。我々と同じ弱い人なんです。でも、もし今、すぐそこで人が死のうとしているのを見かけたら、助けるために飛び込んでしまう。ちっとも強くはない普通の人であっても、その時にはやむにやまれぬという気持ちになる。そういうものだと思います。

火事で子どもが焼け死にそうになっているのを見れば、その子のお母さんは周りの人が止めても聞かずに飛び込んでいきますね。お母さんは必ずしも強い人ではなく、弱いお母さんだって子どもを助けなければいけない時にはそうなる。代わりに自分が死んじゃうかもしれないけどやる。

「アンパンマンのマーチ」の中に、

愛と勇気だけが友達さ

⑦ という歌詞があります。それで抗議がきたことがあるんだけど。これは、戦う時は友達をまきこんじゃいけない、戦う時は自分一人だと思わなくちゃいけないんだということなんです。お前も一緒に駆けと道連れをつくるのは

良くないんですね。無理矢理ついてくるなら仕方ないけどね。

横断歩道もみんなでわたれば怖くない、悪いことをする時にも群衆でやれば怖くないというのがあるけど、責任は自分で負うという覚悟が必要なんだということなんです。

（やなせたかし『わたしが正義について語るなら』ポプラ新書）

※拮抗……たがいに張り合うこと。

※新印象派……芸術の一つの流派。

問一——線部(a)・(b)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二——線部①「アンパンマンは、ばいきんまんが死なないように殴^{なぐ}っている。」とありますが、実際の世界でもこれと同様にばい菌^{きん}が必ずしも死なないようにしています。それはなぜだと筆者は考えていますか、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問三——線部②「アンパンマン対ばいきんまんの戦いと同じです。」とありますが、どのようなことが同じなのですか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問四——線部③「健康な社会」とありますが、ここではどのような社会のことを言っているのですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ばい菌が全くない清潔な社会。

イ 人間がばい菌より優位に立つ社会。

ウ 人間とばい菌とが、存在する社会。

エ 医学が進み、ばい菌を追放した社会。

オ いろいろなばい菌が存在する社会。

問五——線部④「とにかく全部善良というわけにはいかなくて、必ず敵対するものがある。そのバランスが良くとれている時が健康な社会です。」とありますが、「敵対するもの」にあたる言葉を本文中から三文字で抜き出して答えなさい。

問六——線部⑤「正義は勝ったと言っていばつてゐるやつは嘘^{うそ}くさいんです。」とありますが、筆者がそのように言うのはなぜですか。解答欄^{かいとうらん}の大きさを考えて説明しなさい。

問七——線部⑥「やむにやまれぬ」とありますが、本文中の意味としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 難しくても助けることをやめられない。

イ するつもりだったことをするのをやめる。

ウ 本当はしたくないが、しかたなくする。

エ どうしてもそうしないではいられない。

オ 重大すぎてどうすることもできない。

問八——線部⑦「戦う時は自分一人だと思わなくちゃいけないんだということ」とありますが、この例は筆者のどのような考えに基づ^{もとづ}くものですか。本文中から二十五字以内で抜き出して答えなさい。

国語解答用紙（一回目）

(注意 字数に制限があるときは「、」や「。」も一字とします。)

総	点
科	目
国語	
受験番号	
氏	名

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$
[illegible]
$$\left[\begin{array}{c} \longrightarrow \\ \longrightarrow \end{array} \right]$$
[illegible]